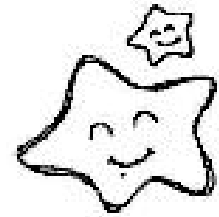


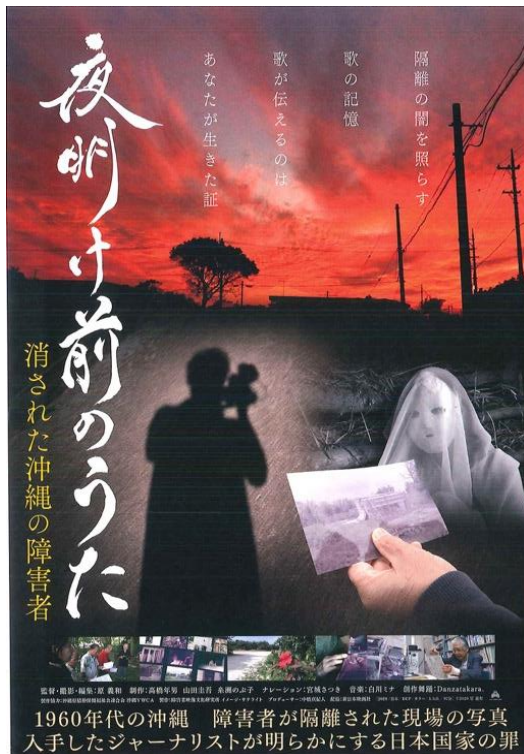
# QSK にぬふあぶし

No.290

ね  
子の方向の星(北極星)



ドキュメント映画『夜明け前のうた～消された沖縄の障害者』  
4月3日より、沖縄・桜坂劇場での公開が始まります



桜坂劇場での上映時間は以下の通りです

4/3(土) 11:30/21:30

4/4(日) 13:00

4/5(月)～9(金) 11:30

4/10(土) 11:30

4/11(日) 10:30

4/12(月)～15(木) 11:30

4/16(金)～18(日) 休映

4/19(月)～22(木) 11:10

4/23(金) 11:10/21:20

4/24(土) 20:30

4/25(日) 18:20

4/26(月)～29(木) 18:10

4/30(金) 18:10/20:20

3月20日の東京を皮切りに、4月9日京都、10日に大阪と横浜、17日神戸、名古屋、24日厚木、5月7日からは盛岡での上映が決まっています。

記載のない各地の最新の上映会場は、公式ホームページをご確認ください。

(<http://yoake-uta.com>)

前売り券(全国共通券1,200円)は沖福連でも取り扱いいます。送料無料。

## ✂ 巣ごもり 物作り ✂ ふれあいプラザ宮古

巣ごもり生活も当たり前になってきた中、皆様はどのように過ごしていますか？ ふれあいプラザでは、あれやこれやとせっせと物作りをしています。

以前からピンクの紙が大量にあり、スタッフ&メンバーさんでいろいろ考えた結果、こんな時期だから「桜を見たい」の声に応え、壁面画を作ることにしました。

みんなでクルクル巻いた紙を花びらに見立てた横1.5×縦1mの超大作！ 来る日も来る日も紙を巻き、一つずつ♡型に整え、5枚ずつ花びらにして貼る&貼る！ 幹は本物の木の皮を張り合わせ本格的な作品に仕上げました。『YOZAKURA～宴を夢みて～』by プラザ☆オールスターズ として障害者週間「文化作品展」に出品、宮古島市の新庁舎に満開の桜を咲かせました。そして、なんと優秀賞をいただきました。



今年の節分、鬼といえば鬼滅の刃『憎珀天』<sup>ぞうはくてん</sup>。

ヲタクスタッフの意見を参考にオリジナリティを加え、凝りに凝った鬼になりました。三密を避けての豆まきということで、それぞれ「鬼は外」「コロナは外」「ウィー」と豆をぶつけての節分となりました。

ひな祭りも鬼滅の刃・・・お内裏様は炭治郎、お雛様は禰豆子の兄妹おひな様を作りました。着物には布を使い、丹次郎色に染めたり、アクセサリーも本物に近いよう細部にもこだわりました。

ランチの会では「雛ちらし」を作り、飲食は禁止のためテイクアウトで帰ってもらい、ささやかなひな祭りをしました。

鬼滅の刃作品はメンバーさんのお孫ちゃんにプレゼント・・・丹精込めて作ったので、喜んでいただいて HAPPY な気持ちになりました。



## 地域生活支援センター「なんくる」(那覇市) 開所のころ

高橋年男 (沖福連事務局長)

かつて沖縄県における「精神障害者地域生活支援センター」の設置に際し、県と市町村、医療・福祉の関係者が、沖福連(てるしの)に集った。当時の7つの保健所(北部、石川、中部、中央、南部、宮古、八重山)ごとに、精神保健・医療・福祉の社会資源を拡充・配置し、それらを支援センターが各地域の中心となり機能させることとして、15万人圏域当たり1か所、県内を9か所でカバーするという整備計画がたてられた。(1997年、検討委員会で数値目標を設定、翌年に「沖縄県障害者プラン」策定)

南風原(てるしの、1996年)から事業が始まり、浦添(あおぞら、1999年)、2000年に糸満(ひかり)、名護(ウェーブ)、沖縄(おきなわ)と続き、宮古(ふれあいプラザ)、八重山(まーる)、那覇市(なんくる)が2003年に開所した。最後にうるま市(あいあい)で9か所が整った。

始まった時の支援センターは国の事業として、国と県が委託費を二分の1ずつ負担し、市町村の境界をこえた広域で利用できる柔軟な運営ができる仕組みであった。

保健・医療ともリンクして、退院後の地域での生活を利用者本位でやっていこう、「病院・施設から地域へ」という躍動感あふれる時代の到来であった。当事者の自己決定を尊重し、必要なサービスを社会的に保障する「支援費制度」が始まったのもこの当時だった。

「地域から病院へ迎えに行こう」を合言葉に、退院促進事業も支援センターを拠点として、ピア・サポート、家族相談などとともに始まった。民生委員との協力関係や、ホームヘルプ在宅支援、地域・家族丸ごとの支援、職親制度のような一般の事業所で就労に向けた支援を取り組むなど、支援センターのアウトリーチ力が地域の活性化にもつながった。地域からスポーツや文化の風を起こす、ドライブにもビーチパーティーにも誘い合って楽しみ、一緒に汗を流す取り組み、地域に貢献する支援センターが輝いていた。懐古的に過ぎるかもしれない、地域生活支援センターに対する期待値は大きなものがあつた。

しかし、何年もたたないうちに地域に軸足を置いた地域生活支援事業は、国の事業から市町村の事業へと移行した。(次のページへ)

(前のページから) 日本経済の斜陽と予算配分の偏りから精神保健予算が削られて、マンパワーは縮小、市町村事業となったことで他の市町村の利用者は切り捨てられた。2000年当時に地域の生活者目線で描いた障害者プランは、専門職の処遇計画にとって代われ、自己決定権を保障する仕組みは大きく後退をした。

地域でお隣さんと普通に暮らすことを支えようとした支援費制度は、2008年の「障害者自立支援法」に変わり、地域に軸足を置こうとした障害者が施設へと囲われる逆転現象まで起きた。就労こそがゴールだと、そこに追い立てるような福祉事業所のプログラム、工賃アップによる訓練給付費加算の経済的誘導などで、障害者と言われる人々の個性や、特別な能力の芽を摘んでしまうことにはお構いなしだ。

バブルがはじけた後の「失われた20年30年」と言われるように、日本の経済成長は過去の話になってしまった。自動車も家電も、作れば作るほど売れた時代は戻ってこない。少子高齢化で人口が減少に転じ、国内の総需要が増えない状況で、政府がいくら量的緩和(アベノミクス?! )を通じて資金を注いでみても、経済鈍化の傾向を免れることはできない。

長期政権は、生活者感覚からは受け入れがたい原発や軍需産業の「〇〇村」の既得権に胡坐をかき、国策のルールからの逸脱を許さない窮屈な社会システムを続けたことで、社会的格差の拡大を招いた。総需要が増えないのは、就職氷河期と言われた40歳代の日本社会の中堅層をはじめ、非正規労働者が4割を占める貧困率の増大が大きな原因である。

引きこもりが8050問題として大きく注目を浴びるようになったが、「日本の未来に希望があるか？」と将来の福祉社会の在り方について、国民的な議論が不可欠である。

「なんくる」の閉所が、「哲学の貧困」を問う契機となれば、スタッフの選択は報われるのだが・・・。



## 株式会社ユニティーの発足に寄せて

沖縄市の『ワークプラザ・ユニティー』が、4月から沖福連を離れることになった。

最初にこの話を聞いたのはもう1年くらい前だったと思うが、そのときに自分は内心で、それはそれはショックを受けたことを覚えている。沖福連全体の財政面に対する影響はさておくとしても、所長の比嘉さんは、沖福連における頼もしい先輩であると同時に、ぼくにとっては個人的に波長の合う良き話し相手でもあったからだ(あちらがどう思っていたかはわからないけれど)。

比嘉さんはたいていいつも前向きな考え方をしている。反対に、後ろ向きでビビりな自分からすると、とても「強い人」に映る。今回の独立にしても、必ずしも楽観的な見通しに開けていたわけではない。当初からいくつもクリアすべき課題があったし、コロナという状況も重なり、場合によっては期日を先延ばしにしてもいいのでは、とこちらは勝手に感じてもいたが、比嘉さんは最初の宣言通りの考えで一貫していて、ブレることがなかった。

「開示すること」の大切さを、比嘉さんとの会話のなかで何度も耳にした。自分の抱えている不安や弱さのようなネガティブなことも含めて、なんでもまわりにオープンにしたらいいよ、とアドバイスをもらってきた。

いまある社会のなかでは、それぞれの脆弱さをつまびらかに見せることには努力がいる。みんなが強くあろうとし、大きく見せようとし、「なんでもないよ」という顔をついつくろってしまう。でも比嘉さんからすれば、本当の「弱さ」とは「自分を見せられないこと」にほかならない。

比嘉さんがナチュラルに見えるのは、そういう考え方、個人としての哲学を感じるせいかも知れない。彼はユニティーの強みについて、「有資格者のいないこと」と話す。福祉に染まらない普通の感性を大切にしている。いかにも“支援者”という顔をした人のことはぼくも苦手なので、“専門家不在”のユニティーに足を運んだときには一種の懐かしさと安心感に気分がほぐれる。比嘉さんだけでなく、他のスタッフやメンバーそれぞれがいて、そういう場と空気を作っている。

今後、事業所の名称からは『ワークプラザ』が外れて、たんに『ユニティー』になる。というふうに、「働くこと」とか「生産性」みたいなことは正直どうでもいい。

(次のページへ)



(共同作業所時代の看板)

(前のページから) でも比嘉さん自身が「働くこと」を通してリカバリーしてきたという実感を持ってもいる。誰かと一緒に過ごすこと、なにかを共有するための媒体としての「仕事」がある。

安定した事業運営を評価されることがあっても、ユニティーはただ「いつもと同じことをやっているだけ」。この「いつもと同じこと」に出会うために、多くの人たちが集まってくるのだと思う。もちろんこれから新しいチャレンジが始まるし、それはそれで楽しみではあるのだけれど、この祈りのような「いつもと同じこと」の本質は、なにも変わらないはずである。(てるしの・増山)



## ★職員募集★ ヘルパーステーションてるしの

所在地 那覇市三原 2-15-13 ひかりビル 1F  
雇用形態 フルタイム、パートタイム、登録ヘルパーなど相談に応じる  
(詳しくはご相談ください)  
採用要件 介護職員初任者研修以上 要普通運転免許(AT可)  
仕事内容 障がい福祉および介護保険における、利用者居宅の訪問によるサービスの提供。  
ホームヘルパー(※居宅介護、同行援護、重度訪問介護など)  
労働条件等 雇用形態ごと、就業規則による  
問合せ・申し込み 電話 098-927-6345 (玉城)

### ◎編集後記◎

最初から「じっとしてなにもしないこと」が、本当はいちばんリスクが少ないはずなのに、人はついなにかを始めずにいられないし、それで失敗したり傷ついたり悩んだりする。もうなにもしなければいいのに、またなにかを始めてしまう。國分功一郎氏の『暇と退屈の倫理学』は、そんな人間の矛盾を問う一冊でした。(増)

編集：公益社団法人

沖縄県精神保健福祉会連合会

会長 山田 圭吾

〒901-1104

沖縄県島尻郡南風原町字宮平 206-1

てるしのワークセンター内

電話 098-889-4011 FAX098-888-5655

E-mail [terushino@castle.ocn.ne.jp](mailto:terushino@castle.ocn.ne.jp)

発行：九州障害者定期刊行物協会

〒812-0054 福岡県福岡市東区馬出 2-2-18

電話 092-753-9722 FAX092-753-9723

定 価：10円(会費に含まれる)